

江戸後期から明治期の紀行文・登山記録に残された白山のライチョウ

小川 弘 司*¹・永 井 肇*²

*¹石川県白山自然保護センター、*²学校法人明德学園相洋高等学校

Rock ptarmigan (*Lagopus mutus japonicas*) of Mt. Hakusan written by the travel journals and mountain climbing records from the late Edo period to Meiji period

Hiroshi OGAWA*¹, Hajime NAGAI*²

*¹Hakusan Nature Conservation Center, Ishikawa, *²Incorporated School of Meitoku Gakuen, Soyo High School

はじめに

白山のライチョウは、後鳥羽院が詠まれた「しら山の松の木蔭にかくろひて やすらにすめるらいの鳥かな¹⁾」(1310年(延慶2)頃の作とされる歌集『夫木和歌集』)の御歌に代表されるように、我が国の文献に初めて登場するライチョウとされている(広瀬, 1972)。

1816年(文化13)作の『越前国名蹟考』には「此御山らいといふ霊鳥有り 其形雉子に似たり 常に是不見 禪定する人の中に信心なる者或は心正直なる人には顕はれて見ゆ」とあり、霊鳥として雷除けなどとして守り札や羽を守り袋に入れたりし、また白山山上にいる雷鳥の絵を書いて、掛け軸として家に飾り、火事よけ、災難よけ、雷よけとして崇められていたとされる(國幣中社白山比咩神社, 1927)。

このように白山のライチョウは特別な鳥として人々に認知されていたが、大正年間から1930年代にかけて絶滅のプロセスをたどったと推定されている(花井・徳本, 1975)。そのライチョウが2009年に一般の登山者によって白山で発見された時は(環境省中部地方環境事務所, 2009)、70年ぶりの確認といわれ新聞に大きく報道された。

白山のライチョウの過去の生息実態はどのようであったかは、興味深いところであるが、その詳細を明らかにすることは難しい。江戸時代の18世紀前半には、加賀藩が町人を集めて目撃記録を調べたり、

人を派遣して白山のライチョウを調べにやったりしたという(小坂, 2011)。その記録からはライチョウであることは確認できるが、それがどの範囲にどの程度の数がいたかまでは定かではない。

花井・徳本(1976)は、近世の白山に関する文献の中からライチョウを直接観察した文献を調べ、江戸後期において6件の観察記録があったことなどを報告している。また、上馬・佐川(2011)は文献調査や聞き取り調査によって、明治期に3件、昭和期に5件、平成に入ってから先々の1件も含め2件の目撃についてその目撃場所と目撃月日を明らかにした。

筆者は、白山の過去におけるライチョウのより詳細な生息状況を明らかにし記録に残しておくことが、絶滅に至った経緯を知り、また白山のライチョウを理解するうえで重要であると考えている。

本稿では、花井・徳本(1976)や上馬・佐川(2011)同様に、過去の文献をたどりライチョウの白山での生息を確認することを試みた。具体的には江戸期後期から明治期にかけての文献からライチョウの目撃等の記録をたどり、白山でのライチョウの生息を把握することとした。

文献の収集と整理

信仰の山として崇められ、信仰登山が古くから行われていた白山には、江戸期後期には武士や文人による紀行文、明治期には近代登山がはじまり、学校の集団登山やスポーツ登山も行われ、そのすそ野の

広がりとともに登山記録も多く残されている。このような紀行文や登山記録の中にライチョウの目撃の情報がないかを調べた。

今回収集できた紀行文や登山記録は、江戸期から大正期も含め39点であった(表1)。ほかにもまだあるとも思われ、さらに古い時代のものもある可能性はある。

収集した文献からライチョウを現地で目撃した記録が記述されているものを選択した。あくまで選んだものはライチョウを目撃したものを選び、ライチョウの解説などを記述しただけのものは除いた。結果、39点中25点が目撃記録が記述されたものであった。傾向として、明治期でも後半になると目撃記録を持つものが少なくなった。大正期のものは3点だけだったがいずれの史料にもライチョウの目撃記録はなかった。

次に選択した文献からライチョウの目撃記録にあたる部分を抜き出し、その記載内容がライチョウに間違いがないかを検討した。

ライチョウは国内では高山域のみに生息する鳥であり、里地や平地での一般的な鳥とは違い、多くの登山者にとっては見たことがない鳥である。花井・徳本(1975)はホシガラス、上馬・佐川(2011)もヤマドリなど他の鳥との混同を指摘しており、この検討を踏まえないとライチョウの目撃と断定することはできない。各文献の記録内容を表2に示す。

記載に当たっては、原則として出典文献に記されたとおりに抜き出しをした。このため、底本でなく翻刻・校訂されたものもそのとおりに記載している。積文のある場合はそちらからの出典とした。ただし、読みやすく整えるため、一部旧字体は新字体に合字は平仮名・片仮名にし、また文中には適宜余白を設けた。また、著者の注記を<>で付した。そのほか、雷鳥の「雷」は「鵜」,「鵜」と記されたものはすべて「雷」として統一した。

その上で、ライチョウの目撃日、場所、時間、天候を前後の文章から判断した。ライチョウは猛禽類等の天敵動物からの難を避けるため、見通しのきく晴れた日にはハイマツなどの中でじっとしてその中から出てこない習性がある。また、時間としては朝の早い時間や夕方などの時間に採餌等を行うことが知られており、ライチョウと断定する判断材料とした。

ライチョウの目撃記録

目撃記録がライチョウとして間違いがないかの判断

表1 収集した白山の紀行文や登山記録

No.	登山時期	書名	著者等	ライチョウ目撃記録
1	1710年(宝永7年)	白山道記	不明	無
2	1785年(天明5年)	白山遊覧圖記 卷之一 紀行	金子有斐	有
3	1813年(文化10年)	白山紀行	小原 益 (小原氏益)	有
4	1819年(文政2年)	白山行	湖棹、芳雨	無
5	1822年(文政5年)	白山草木志 下	畔田伴存	有
6	1823年(文政6年)	三の山巡	尾張藩士某	有
7	1830年(文政13年)	白山全上記	加賀正某	有
8	1831年(天保2年)	白山道之栗	此君園琴路	有
9	1833年(天保4年)	続白山紀行	高田保浄	有
10	1841年(天保12年)	山分衣	山崎弘泰	有
11	1846年(弘化3年)	白山行程記	天方友諒	有
12	1850年(嘉永3年)	白岳遊記	金子盤蝸稿	有
13	1850年(嘉永3年)	白山禪定之日記	富田雨村	無
14	1851年(嘉永4年)	白山禪定日記	不明	有
15	1860年(万延元年)	白山紀行	後藤雪袋	有
16	1862年(文久2年)	又寝の夢物がたり	高林景寛	有
17	1884年(明治17年)	登嶽紀事	横山政和	有
18	1886年(明治19年)	白峰乃菴	化々道人	有
19	1888年(明治21年)	白山紀行	勝山千百里	有
20	1888年(明治21年)	白山遊記	今川以昌	有
21	1890年(明治23年)	白山遊記	小杉復堂	有
22	1890年(明治23年)	北陸遊記	宍戸昌	有
23	1896年(明治29年)	登白山記	村上珍休	有
24	1896年(明治29年)	白山登山の記	楓溪山人	無
25	1897年(明治30年)	白山紀行	田中一次郎ほか	有
26	1899年(明治32年)	山分衣	泉甚太郎	無
27	1899年(明治32年)	白山行	木崎愛吉	有
28	1900年(明治33年)	白山登山紀行	橋本政修	無
29	1903年(明治36年)	白山登山之記	米溪生	無
30	1907年(明治40年)	白山行紀	風雅堂人	有
31	1907年(明治40年)	加賀白山登山	大平晟	有
32	1909年(明治42年)	白山登り	石川師範学校A生/ 金沢師範学校教諭 M生	無
33	1909年(明治42年)	白山登山紀行	古瀬鶴之助	無
34	1909年(明治42年)	続三千里	河東碧梧桐	無
35	1910年(明治43年)	春の白山	石崎光瑠	有
36	1910年(明治43年)	白山登山記事	不明	無
37	1916年(大正5年)	白山登山日記	中田勇	無
38	1916年(大正5年)	白山登山記	浅田与作	無
39	1919年(大正8年)	白雲攀記	高島生	無

材料は、主としてライチョウの形態的特徴や習性の記述からとした。形態的な特徴については中部地方環境事務所が2009年に白山で発見されたライチョウの目撃情報を得る際に作成したライチョウの特徴を示したチラシ及び富山県立山自然保護センターのウェブサイト(<http://raicho-mimamori.net/jp/>)で示されたライチョウの形態の特徴等のほか、2009年の白山のライチョウを実際に調査し、白山の鳥全般に

詳しい上馬康生氏の情報をもとに、以下の点を判断の材料とした。

形態的特徴

- ・大きさ：ヤマドリより小さく、ホシガラスやキジバトより少し大きい。
- ・オスは赤い鶏冠，メスも目の上に赤い縁があること。
- ・足は爪を残して足先まで羽毛で覆われていること。
- ・翼が全体に白く飛翔すると下（腹面）も上（背面）も白いこと。

また、標高2,000m以上の高山域において、産卵後の7月～9月にかけて親鳥（メス）とヒナ数匹がともに行動することも重要な判断材料とした。これに加えて先述の天候や時刻も含め総合的に判断をした。

その結果を表2に「ライチョウと断定」欄を設け示す。ライチョウと断定したものは○，断定しきれないものは△，ライチョウとは違うものは×と，便宜的に記号を付けて示した。

結果、25件の目撃情報のうち10件をライチョウの目撃情報とした。表中8の目撃記録は違う場所での目撃であり、2件の情報とした。なお、ライチョウであるかどうかは先にも触れたように、鳥について知識のない登山者が初めて遭遇した場合には間違いはつきものであり、目撃者がそのことで非難されることはない。

以下、この断定した、断定しなかったの個々の結果について補足する。番号は表2の番号と一致する。

2、4、5はライチョウと断定した。気になる記述内容もあるが、ライチョウの特徴が示されている。特に4の記述内容は非常に正確である。

8はライチョウの特徴は記されていないが、むろ守の子からライチョウである旨伝えられたこと、ライチョウを捕獲するが捕獲できるほど人を恐れず動きが鈍いことからライチョウと断定した。

9は、村井（2012）によれば、『続白山紀行』を下地にして著者が書き加えるなどした紀行文とあり、記述内容は7の『続白山紀行』と酷似している。しかし、その内容はライチョウの特徴としておかしなものではなく実際にその特徴をもつライチョウを見たとしており、ライチョウと断定した。

13、14も親鳥とヒナが、人を恐れず出てきているものとしてライチョウと断定した。19はヒナの大き

さの特徴を捉えるなどしておりライチョウと断定した。

25は残雪期の5月に、冬羽を主にオスの特徴の赤い肉冠を確認しており、ライチョウに間違いのないと思われた。

ライチョウと断定しきれなかったものには、記述内容に、目撃されたライチョウの特徴が明確に示されないために判断できかねたものが多々あった。それは、1、3、15、17、18、20、23、24である。

7は、記述内容はライチョウの特徴をとらえているが、ライチョウを目撃したと明確には示されていない。著者の高田保浄は、『越前名蹟考』の著者の井上翼章の次男で、『白山全上記』の著者の加賀正教とも親交が深かったので（福井県文書館，2006）、ライチョウの記述は両文献からの引用ばかりとなっており、この点も気になった。

10は、親鳥とヒナの目撃であるが、9月上旬になるとヒナの大きさは親鳥と変わらないということ、ヒナの数がライチョウとしては多く、またこの時期になれば捕食されて数が減ることが多いことなどから断定しきれないものとした。

11はライチョウの特徴を示していると思われるが、色が青菜色としている点に合点がいけない。12はメスの特徴として、さか（鶏冠か）赤く脊（背中）が灰色に黒点の表現は違う。

16は目の縁がメスの特徴である赤色であることを示しているが、色が紺鼠色とはいえない。21は黝色の斑点や秋蟲の鳴き声となるとホシガラスの可能性も捨てきれない。

以上がライチョウと断定しきれないとしたものである。

最後にライチョウと違うものとしたのは、6及び22である。6はホシガラス、22は赤い冠に長くちばしをもち、鳥の鳴き声もライチョウと違うと思われた。

目撃情報には、目撃者の表現自体にも正確さに欠ける点もあり、今回はこのような形で整理をしたが、断定しなかった中にもライチョウに間違いのないものもあると思われる。結果としてライチョウと断定したものは情報件数に比べ少ない結果となった。

ライチョウの目撃記録から言えること

最後にライチョウと断定した目撃記録から言えることを整理した。

10件の目撃記録の内訳は、江戸後期のものが7件、明治期のものは3件であった。一番古いものは1813

年（文化10）の『白山紀行』で、新しいのは1910年（明治43）の『春の白山』によるものだった。この期間、ライチョウが白山に生息していたと言えるが、それが個体群としての存在であったかあるいは2009年のように他山岳から迷い込んだものか、それを判断するには絶対数としては少ない。分布域は現在の白山の山頂部の核心部となる大汝峰から御前峰、室堂から弥陀ヶ原にかけての地域、それと別山の範囲がそれにあたった（図1）。この分布は上馬・佐川（2011）が示した白山におけるライチョウの推定なわばり分布と大きく外れるものではない。

また、確認されたライチョウの目撃にはヒナを連れた親鳥の確認事例が多くみられ10件のうち6件はヒナを伴うものであり、間違いなく繁殖をしていたことがわかった。

おわりに

江戸期後期から明治期の白山での紀行文や登山記録に記述されているライチョウの目撃情報から、当時のライチョウの生息状況の把握を行った。目撃情報と断定したものから、生息分布の一端を知ることができたが、情報の絶対量が少なく、分布の連続性や個体群としての存在を把握するには至らなかった。少なくとも繁殖をしていたことは間違いない。

先にも触れたが、記述内容が正確にライチョウの特徴を伝えているものは少なく、今回断定しなかったものにもライチョウと考えてよいものもあると思われる。

目撃記録の内容は表2に示したので、読者からの意見をいただければ幸いである。今後とも過去の記録を収集し、白山のライチョウの過去の生息実態の把握に努めていきたい。

謝 辞

本稿での史料の収集にあたり、福井県立歴史博物館並びに白山比咩神社には所蔵文献の閲覧に協力いただいた。上馬康生氏には、ライチョウの生態や形態的特徴にご教授いただき、文献の目撃記録内容からのライチョウと断定の可能性について意見をいただいた。ただし、最終的には筆者が判断を行った。ご協力いただいた皆様にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

注

注1) 御歌はもともと1200年（正治2）作の『正治

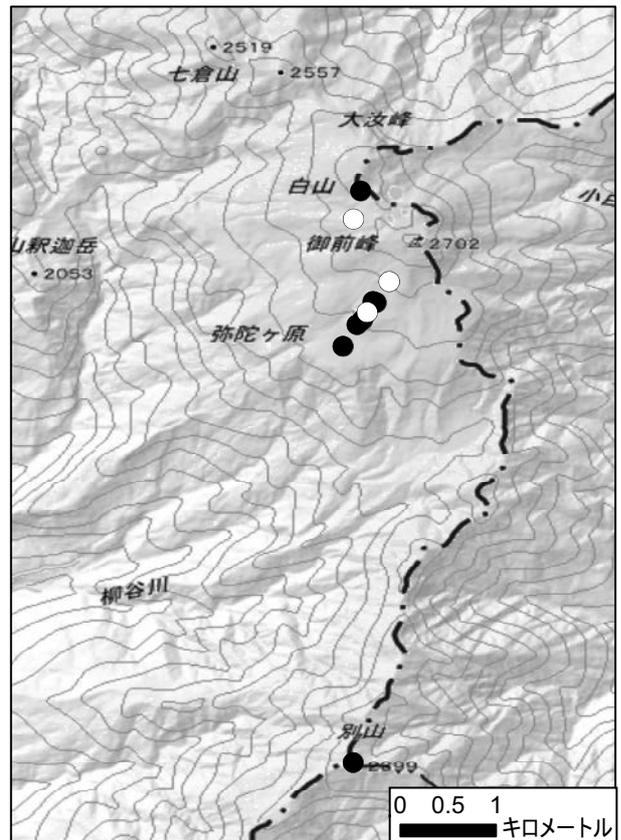


図1 ライチョウと断定した目撃記録の目撃場所

●：江戸後期の目撃場所 ○：明治期の目撃場所
背景図は、国土交通省地理院地図 (<https://maps.gsi.go.jp/>)を使用した。

初度百首』の中も詠まれていたもの。

引用文献

- 福井県文書館（2006）白山紀行—ふくいからの参詣記録。12pp.
- 花井正光・徳本 洋（1976）白山におけるニホンライチョウ、*Lagopus mutus japonicus* の絶滅について。石川県白山自然保護センター研究報告，3，95-105.
- 広瀬 誠（1972）雷鳥の古文献。富山県教育委員会（編）立山の雷鳥，246-252。富山県。
- 環境省中部地方環境事務所（2009）白山におけるライチョウの確認情報。報道発表資料，2pp.
- 國幣中社白山比咩神社（1927）國幣中社白山比咩神社略史。48pp.
- 小坂 大（2011）歴史の中の白山のライチョウ。はくさん，39-2，2-6.
- 村井加代子（2012）口訳白山行程記。能登印刷出版部，150pp.
- 上馬康生・佐川貴久（2011）白山におけるライチョウの生息可能性数の推定と絶滅について。石川県白山自然保護センター研究報告，38，47-56.